

原 著

胎盤娩出様式の頻度に關する統計學的觀察

Statistical Investigations into the Incidence of the Modus of the Placental Delivery

東京大學醫學部産科婦人科学教室 (主任 長谷川教授)

醫學士 塩 見 勉 三 Benzo Shiomi

(本論文の要旨は昭和23年4月日本婦人科学會總會で發表した.)

内容目次

第1章 緒言

第2章 正常分娩

第1節 頻度

第2節 年齢

第3節 経産回数

第4節 第3期持續時間

第5節 第3期出血

第6節 後出血

第7節 児體重

第8節 小括並に考察

第3章 異常分娩

第1節 高年初産婦

第2節 人工破膜

第3節 臍帶卷絡

第4節 双胎

第5節 骨盤位

第6節 胎勢並に回旋異常

第7節 陣痛促進法

第8節 小括並に考察

第4章 總括

主要文献

第1章 緒 言

分娩第3期は胎児娩出に始まり、胎盤及び其の附屬物の娩出を以て終了するのであるが、その胎盤の娩出には胎児面娩出(シュルツェ氏法)、母體面娩出(ダンカン氏法)、半母體面娩出(混合法)の3様式が區別される。從來胎盤の剝離機序に關しては様式の如何を問はず機械的作用が信ぜられて

いた。即ち

(1) 胎児面娩出の場合

胎盤はその中央部に於て剝離し始め、次第に周邊に及び、剝離出血は胎盤と子宮壁との間に潑留して、胎盤後血腫を形成し、之に依り陣痛が益々促進せられる傍ら、胎盤は自己並に後血腫の重量に依り完全に剝離し、胎児面を下向部として娩出される。この様式は胎盤が子宮底近くに附着する場合に多く、頻度が最も高い。

(2) 母體面娩出の場合

胎盤はその下端より剝離し始め、次第に上方に進み、その下縁又は母體面を先にして陰裂に現われる。之は胎盤が子宮下部、前壁、側壁に附着する際に見られ、且つ胎盤娩出前の出血が多い。

然るに其後Warnekros(1918)及びWeibel(1921)等のレ線學的研究に依り之等は眞の剝離機序でないことが判明した。即ち氏等は胎盤が狭い收縮輪を通過するまでは何れの部分で剝離し始めるにしてもその機序は同一であるが、洞筋部より産道内に下降する際には、常にダンカン氏法で剝離し、之がそのまゝ産道を通過し、その邊緣が陰裂に現われればこれが母體面娩出であり、他方産道通過中に更に回轉してその位置を變じ、母體面が卵膜に被われ多少鉤状をなせば、之が胎児面娩出と言ふべきものであると述べた。

以上剝離機序に關しては種々な説があり、從來の娩出様式如何に依り分娩時出血に著差があるとする報告は多いが、娩出様式に關する研究は少く

僅かに八木(昭17)の報告を見るのみである。

余は吾教室昭和16~22年に於ける分娩5606例に就き、之を調査し、いさゝか新知見を得たので報告する。

第2章 正常分娩

第1節 頻度(第1表)

第1表 頻 度

母 體 面	半 母 體 面	胎 兒 面
800	931	3875
14.270±0.413	16.608±0.502	69.122±0.611

總數 5606 例中母體面娩出 (以下娩出を略す) 14.270%, 半母體面16.608%, 胎兒面69.122%で之を山田の母體面 9.64%, 半母體面 17.52%, 胎兒面 72.07 %に比すれば、母體面の頻度は多く、半母體面並に胎兒面の頻度は少い。又八木の母體面18.3%, 半母體面5.9%, 胎兒面75.7%に比すれば、母體面並に胎兒面の頻度は少く、半母體面の頻度は多い。

第2節 年齢(第2表)

第2表 年 齡 別

	母 體 面	半 母 體 面	胎 兒 面
20歳以下	10 1.552±0.487	15 1.832±0.469	73 2.095±0.243
21~25歳	*112 17.382±1.427	198 24.176±1.495	900 25.830±0.742
26~30歳	228 35.386±1.884	290 35.409±1.671	1248 35.818±0.812
31~35歳	176 27.315±1.756	179 21.856±1.444	785 22.530±0.708
36~40歳	85 13.192±1.335	104 12.698±1.163	382 10.963±0.472
41~45歳	32 4.966±0.855	29 3.541±0.813	88 2.526±0.266
46~50歳	1 0.155±0.155	4 0.488±0.244	5 0.144±0.064
總 數	644	819	3481

20歳以下では3者の間に著差を認めないが、21~25歳では母體面は胎兒面に比して著しく頻度が少く、その差は有意である(以下表中* は胎兒面に比して母體面或は半母體面の頻度が統計學的に有意の差があることを示す)。半母體面は胎兒面に比して著差は認めがたい。26~30歳でも3者の間に

著差がなく、31歳よりは年齢の増加と共に母體面は胎兒面に比して増加の傾向を示し、半母體面も同様であるが母體面より著明でない。即ち母體面は25歳までは頻度が少いが、漸次胎兒面に比して増加の傾向を示し、半母體面は胎兒面に比べれば35歳までは頻度は少いが、それ以後は漸増の傾向を示す。即ち若年者には胎兒面、次いで半母體面が多く、31歳以上では母體面が増加の傾向を示す。

第3節 経産回数(第3表)

第3表 經 産 別

	母 體 面	半 母 體 面	胎 兒 面
1 P	*137 21.276±1.610	*269 32.415±1.625	1592 41.870±0.800
2 P	149 23.140±1.659	189 22.775±1.467	827 21.750±0.669
3 P	103 15.996±1.442	144 17.352±1.315	526 13.834±0.560
4 P	93 14.443±1.385	84 10.122±1.048	348 9.152±0.467
5 P	63 9.784±1.170	69 8.315±0.956	236 6.207±0.124
6 P	57 8.852±1.119	30 3.615±0.648	141 3.708±0.307
7 P	14 2.174±0.575	21 2.531±0.545	83 2.183±0.237
8 P	15 2.330±0.595	13 1.567±0.431	26 0.684±0.134
9 P	10 1.553±0.487	8 0.964±0.347	14 0.368±0.098
10 P	2 0.310±0.219	1 0.120±0.120	4 0.105±0.053
11 P	1 0.155±0.155	1 0.120±0.120	4 0.105±0.053
12 P	0	1 0.120±0.120	0
總數	646	830	3801

初産では胎兒面が最も多く、母體面、半母體面に比して有意の差を示すが、2回産では3者の間に著差がなく、母體面では初産より2回産の頻度が大であり、これは他の2者には見られない顕著な特徴である。3回産では半母體面、4回産以上では母體面が最高頻度を示し、半母體面が中間、胎兒面が最低頻度を示す。

即ち初産では胎兒面が多く、2回産では母體面が急増し、3者ほど同程度の頻度を示すが、4回産以上では母體面が増加し、半母體面は母體面と胎兒面とのほど中間に位する。

昭和29年3月1日

鹽 見

351-3

第4節 第3期持続時間(第4表)

第4表 第3期時間

	母 體 面	半 母 體 面	胎 兒 面
5分以下	271 43.008±2.004	336 41.227±1.724	1376 38.666±0.816
6～10分	*211 33.486±1.910	307 37.669±1.697	1431 40.211±0.821
11～15分	69 10.950±1.264	91 11.161±1.116	442 12.420±0.553
16～20分	25 3.968±0.781	42 5.153±0.774	159 4.468±0.346
21～25分	13 2.063±0.576	18 2.209±0.514	56 1.574±0.208
26～30分	6 0.952±0.393	9 1.104±0.366	27 0.759±0.146
31～35分	4 0.635±0.329	3 0.368±0.212	9 0.253±0.098
36～40分	2 0.317±0.228	3 0.368±0.212	14 0.393±0.105
41～45分	2 0.317±0.228	2 0.245±0.173	18 0.506±0.097
46～50分	0 0.245±0.173	2 0.245±0.173	9 0.253±0.098
51～55分	1 0.159±0.161	0	4 0.112±0.056
56～60分	2 0.317±0.228	0	2 0.056±0.040
61分	4	2	11
以上	0.635±0.329	0.245±0.173	0.309±0.093
總數	610	815	3558

5分以下では母體面及び半母體面が胎兒面に比し多いが、6～10分では胎兒面が増加して最高に達し、母體面の頻度に比べ有意の差を示し、11～30分では半母體面が最高頻度を示す。即ち母體面並に半母體面は5分以下の場合に多く、胎兒面は6～10分が多く、それ以上では漸次母體面並に半母體面の頻度が凌駕する傾向を示す。

第5節 第3期出血(第5表)

50cc以下では胎兒面が最高頻度を示し、母體面並に半母體面に比し、有意の差が認められ、更に51～100ccでも胎兒面が最高で、母體面との間にものみ有意の差が認められる。101～150ccでは3者の間に著差は認めがたく、151～250ccでは半母體面、251cc以上では母體面が最高頻度を示しつつ胎兒面に比し増加の傾向をたどり、殊に500cc以上では母體面が他の者に比して大である。即ち母體面は0～100ccでは胎兒面に比し少いが、150ccよりは胎兒面を凌駕し、251cc以上では最高に達す

る。半母體面もほぼ同様で、50cc以下は著しく少く、101～250ccで最高に達し、250cc以上では他の2者のほぼ中間に位する。

第5表 第3期出血

	母 體 面	半 母 體 面	胎 兒 面
50cc以下	*129 21.040±1.646	*182 21.585±1.415	1036 30.044±0.781
51～100cc	*132 21.529±1.660	202 23.957±1.471	989 28.681±0.770
101～150cc	87 14.190±1.409	141 16.723±1.279	524 15.196±0.611
151～200cc	74 12.069±1.315	137 16.248±1.269	328 9.512±0.499
201～250cc	39 6.361±0.966	58 6.879±0.973	159 4.611±0.357
251～300cc	47 7.666±0.846	54 6.404±0.842	154 4.466±0.352
301～350cc	22 3.588±0.751	17 2.016±0.483	69 2.001±0.476
351～400cc	15 2.447±0.624	11 1.305±0.390	67 1.943±0.235
401～450cc	13 2.120±0.582	11 1.305±0.390	38 1.102±0.176
451～500cc	17 2.773±0.915	10 1.186±0.372	24 0.696±0.142
501～1000cc	34 5.545±0.924	22 2.609±0.548	54 1.566±0.214
1001cc以上	4 0.652±0.325	0	4 0.116±0.184
總數	613	845	3446

第6節 後出血(第6表)

胎盤娩出後2時間の出血量を見るに、0～100ccでは胎兒面、101～250ccでは半母體面、251cc以上では母體面がほぼ最高であり、500cc以上では母體面は第3期出血と同様最高を示すが、後出血では第3期出血の頻度の如く有意の差を示す部位がない。即ち後出血量は第3期出血量ほど胎盤娩出様式と密接な関係を有するものとは認めがたい。

第7節 兒體重(第7表)

兒體重 2500g以下では母體面が最高で、殊に2000gまでは、その差が胎兒面並に半母體面に比し著しいが、2501～3000gでは胎兒面が最高で、母體面との間に有意の差が認められ、3001～4000gでは半母體面、4000g以上でも母體面が最高頻度を示す。即ち未熟兒の場合には母體面、正常兒の場合には胎兒面が多く、過熟兒になるに従つて半母體面並に母體面の頻度が胎兒面を凌駕する。

第6表 後 出 血

	母 體 面	半 母 體 面	胎 兒 面
50cc	146	203	940
以下	25.214±1.784	24.644±1.526	28.482±0.786
51~	168	217	1030
100cc	29.104±1.886	26.344±1.534	531.209±0.807
101~	86	128	475
150cc	14.852±1.478	15.539±1.262	14.393±0.604
151~	37	66	260
200cc	6.390±0.571	8.012±0.945	7.878±0.469
201~	29	43	165
250cc	5.008±0.906	5.220±0.775	5.000±0.338
251~	26	26	99
300cc	4.490±0.861	3.156±0.609	3.000±0.297
301~	24	20	69
350cc	4.145±0.829	2.428±0.537	2.091±0.249
351~	11	16	46
400cc	1.900±0.629	1.942±0.480	1.394±0.182
401~	10	5	48
450cc	1.727±0.542	0.607±0.271	1.273±0.195
451~	10	5	43
500cc	1.727±0.542	0.607±0.271	1.303±0.197
501~	30	36	116
1000cc	5.182±0.921	4.370±0.709	3.515±0.321
1001cc	2	4	10
以上	0.345±0.242	0.486±0.242	0.303±0.096
總 數	579	824	3295

第7表 兒體重別

	母 體 面	半 母 體 面	胎 兒 面
500 g	1	0	2
以下	0.162±0.162		0.059±0.132
501~	1	0	3
1000 g	0.162±0.162		0.088±0.161
1001~	7	4	3
1500 g	1.135±0.135	0.478±0.189	0.088±0.161
1501~	17	6	45
2000 g	2.756±0.659	0.717±0.292	1.323±0.196
2001~	79	96	320
2500 g	12.806±1.345	11.472±1.102	9.408±0.500
2501~	*233	336	1543
3000 g	37.769±1.951	40.152±1.694	45.364±0.969
3001~	223	318	1242
3500 g	36.148±1.934	38.001±1.677	36.515±0.825
3501~	52	74	234
4000 g	8.429±1.118	8.843±0.981	6.880±0.434
4001 g	4	3	11
以上	0.648±0.323	0.359±0.207	0.323±0.097
總 數	617	837	3403

第8節 小括並に考察

年齢では若年者には胎児面が多く、31歳を過ぎると、他の2者に比し母體面が多くなる。経産回数では、初産では胎児面、2回産以上は母體面が

急増し、4回産以上で最高の頻度を示す。即ち年齢と経産回数とはほぼ同様であるが、之は若年者には初産が多く、年齢の増加と共に経産回数も増加するためと思われる。しかしながら経産回数では初産の頻度が母體面並に半母體面ともに胎児面に比して有意の差を示し、且つ母體面では2回産が初産より多い点から、胎盤娩出様式の頻度は年齢よりもその経産回数に影響されることが大であると考えられる。

第3期持続時間は5分以下の場合には母體面並に半母體面、6~15分では逆に胎児面が多く、漸次半母體面が増加する。第3期出血は0~100ccでは胎児面、101cc以上では半母體面、更に251cc以上では母體面が多くなる。即ち母體面では第3期持続時間の短いものが多いにかゝらず、第3期出血の251cc以上のものも多く、胎児面では第3期持続時間の6~15分のものが他の2者に比し最も多いが、第3期出血は少い。半母體面はその中間の傾向を示す。即ち第3期出血は胎盤娩出様式に影響されることが大である。

後出血は母體面並に半母體面に多いが、3者の間に有意の差を認める部位がない。即ち後出血は第3期出血ほど胎盤娩出様式に依り影響を受けることが少い。

兒體重では未熟兒は母體面、正常兒は胎児面、過熟兒は半母體面並に母體面が多い。

以上年齢、経産回数、第3期持続時間、第3期出血、後出血、兒體重いずれに於ても、半母體面は母體面並に胎児面の中間の頻度を示し、又いずれの諸点から見ても、胎児面には正常分娩が多く、母體面には異常分娩への傾向が多く認められる。即ち胎盤娩出様式の見地からは、胎児面は正常、母體面は異常と見做される。

第3章 異常分娩

第1節 高年初産婦(第8表)

半母體面が最高で、母體面及び胎児面の間には著差がない。既述の如く正常分娩では30歳以上は母體面、初産は胎児面がいずれも最高を示したが、高年初産婦ではその兩條件が重複するためか、母體面と胎児面とは殆んど同率である。

昭和29年3月1日

鹽 見

353—5

第8表 高年初産婦

	母 體 面	半母體面	胎 兒 面
實 數	43	68	216
百 分 率	5.375	7.303	5.575

第2節 人工破膜(第9表)

母體面が最高, 以下半母體面, 胎兒面の順位であるが, 其の間に著差がない。即ち, 人工破膜は胎盤娩出様式には大なる影響を與えないようである。

第9表 人工破膜

母 體 面	半 母 體 面	胎 兒 面
109	114	423
13.625±1.226	12.243±1.065	10.913±0.503

第3節 臍帶卷絡(第10表)

母體面並に半母體面が殆んど同頻度で, 胎兒面が僅かに多いが著差は認めがたい。

第10表 臍帶卷絡

母 體 面	半母體面	胎 兒 面
164	191	722
20.500±1.427	20.515±1.323	18.916±0.394

第4節 双胎(第11表)

半母體面(2.1%)が最高, 以下母體面(1.1%), 胎兒面(0.6%)の順位であるが著差は認めがたい。但し陣痛促進法を使用した場合のみは半母體面が他の2者に比し多い。

第11表 双 胎

	母 體 面	半母體面	胎 兒 面
正 常	6	8	22
陣痛促進	3	12	1
計	9	20	23

第5節 骨盤位(第12表)

半母體面(4.3%)が最高, 以下母體面(3.8%), 胎兒面(3.1%)の順であるが著差なく, 頭位の場合

と同様である。

第12表 骨 盤 位

	母 體 面	半母體面	胎 兒 面
正 常	22	34	95
陣痛促進	8	6	24
計	30	40	119

第6節 胎勢並に回旋異常(第13表)

胎勢異常の中, 顔位ではその絶対数は母體面並に半母體面が同数で, 胎兒面を凌駕し, 正常分娩に比し著差を認め, 前頂位でも3者の絶対数は殆んど同数で正常分娩に比し著差がある。回旋異常には斯くの如き著差は認め得ない。

第13表 胎勢並に回旋異常

	母 體 面	半母體面	胎 兒 面
顔 位	4	4	1
前 頂 位	19	20	21
後方頂位	1	2	8
低在横定位	1	2	8
計	25	28	38

第7節 陣痛促進法

母體面並に半母體面は殆んど同率であるが, 胎兒面に比べれば著しく多い。方法別には薬物的方法(キニーネ, ピツイトリン等)の場合には胎兒面, 機械的方法(ブジー, メトロイリーゼ, コルポイリーゼ等)の場合には母體面, 兩者併用の場合には半母體面がいずれも最高である(第14表)。

第14表 陣痛促進法

	母 體 面	半母體面	胎 兒 面
薬物的	43	41	117
	51.806%	48.236%	58.500%
機械的	26	21	51
	34.325%	24.707%	25.500%
併用的	14	23	32
	16.867%	27.060%	16.000%
總 數	83	85	200
	10.350±1.077	9.129±0.933	5.167±0.223

但し 總數の頻度は各型正常分娩數に對する百分率を示す

陣痛促進法を使用した場合の第3期出血を見るに, 之を使用しない場合と殆んど同じような傾向

が認められる。即ち 0~100 cc では胎兒面, 101cc 以上では母體面並に半母體面の中いずれかゞ最高であり, 501 cc 以上では半母體面が最も多く, 母體面もほぼ同頻度で, 胎兒面との間に著差を認める(第15表)。

第15表 第3期出血

	母 體 面	半母體面	胎 兒 面
50cc	18	22	54
以下	22.784±4.719	26.506±4.844	27.135±3.152
51~	15	12	62
100cc	18.987±4.413	14.458±3.860	31.155±3.293
101~	12	11	22
150cc	15.190±4.038	13.253±3.742	11.055±2.223
151~	8	10	16
200cc	10.126±3.395	12.048±3.573	8.040±1.927
201~	4	6	15
250cc	5.063±2.476	7.229±2.803	7.538±1.853
251~	4	8	11
300cc	5.063±2.467	9.638±3.293	5.528±1.557
301~	5	2	4
350cc	6.329±2.739	2.410±1.683	2.010±0.995
351~	2	3	5
400cc	2.532±1.767	3.614±2.048	2.513±1.110
401~	3	1	1
450cc	3.797±2.150	1.205±0.502	0.503±1.258
451~	1	1	4
500cc	1.266±1.258	1.205±0.502	2.010±0.995
501~	6	7	5
1000cc	7.595±2.981	8.434±3.050	2.513±1.110
1001cc	1	0	0
以上	1.266±1.258		0
總 數	79	83	199

陣痛促進法を使用する場合の後出血に就て見るに, これも亦正常分娩の場合と同様 0~100cc では胎兒面, 101cc 以上では半母體面或は母體面, 501cc 以上では半母體面が最高である。即ち陣痛促進法を使用する場合にも, 出血量が少いときは胎兒面が多く, 出血量の増加と共に半母體面並に母體面の頻度が凌駕する傾向を示す(第16表)。

次に陣痛促進法を使用した場合の分娩各期とその促進方法の種類との関係を見るに, 薬物的方法の場合には前期, 前期並に第1期に使用したものは半母體面が最高, 第2期のみ使用したものは胎兒面, 第1期並に第2期, 前期並に第1期に使用したものは母體面が最高である。機械的方法の場合には, 前期のみに使用したものは母體面, 第1期, 第2期の各期にのみ使用したものは半母體

第16表 後 出 血

	母 體 面	半母體面	胎 兒 面
50cc	25	22	67
以下	36.233±5.787	32.835±5.738	38.505±3.687
51~	20	13	58
100cc	28.986±5.462	19.403±4.830	33.333±3.574
101~	7	12	12
150cc	10.145±3.635	17.910±4.712	6.896±1.816
151~	7	4	14
200cc	10.145±3.635	5.970±2.928	8.046±2.085
201~	5	3	8
250cc	7.267±3.125	4.478±2.526	4.598±1.415
251~	0	2	5
300cc		2.985±2.332	2.874±1.267
301~	3	4	2
350cc	4.348±2.455	5.970±2.894	1.149±0.872
351~	0	4	3
400cc		5.970±2.894	1.724±0.987
401~	1	0	1
450cc	1.449±1.439		0.575±0.573
451~	0	1	1
500cc		1.493±1.482	0.575±0.573
501~	1	2	3
1000cc	1.449±1.439	2.985±2.332	1.724±0.987
1001cc	0	0	0
以上			
總 數	69	67	174

第17表 陣痛促進法に依る分娩各期の
最高頻度の様式

	薬 物 的	機 械 的	併 用 的
前 期	半母體面 41.463% (17/41)	母 體 面 8.333% (2/24)	
第1期	半母體面 21.951% (9/41)	半母體面 19.048% (4/21)	半母體面 8.695% (2/23)
第2期	胎 兒 面 35.897% (42/117)	半母體面 9.524% (2/21)	半母體面 4.348% (1/23)
第1・2期	母 體 面 11.627% (5/43)	胎 兒 面 35.294% (18/51)	半母體面 30.434% (7/23)
前1期	母 體 面 9.302% (4/43)	母 體 面 41.667% (10/24)	胎 兒 面 62.500% (20/32)
前1・2期		母 體 面 29.167% (7/24)	母 體 面 37.500% (6/16)

面, 第1期並に第2期に使用したものは胎兒面, 更に前期並に第1期, 前期並に第1, 2期に使用したものは再び母體面が最高を示している。兩法併用の場合には第1期, 第2期の各期のみと更に第1, 2期に使用したものは半母體面, 前期並に第1期に使用したものは胎兒面, 前期並に第1, 2期に使用したものは母體面が夫々最高である。即ち胎兒面が最高を示したものは薬物的方法を第2期に使用した場合(主としてピツイトリン)と, 機

昭和29年3月1日

鹽 見

355—7

機械的方法を第1, 2期に使用した場合と, 兩法を前期並に第1期に使用した場合(藥物は主としてキニーネ)とである。

半母體面が最高のものは, 前期, 第1期, 第2期の各期にのみ使用した場合に多く, 之に對して母體面が最高のものは, 前期, 第1期, 第2期のいずれかにまたがつて使用した場合に多い(第17表)。

即ち陣痛促進法を使用した場合には母體面並に半母體面が胎兒面より多く, 母體面は機械的方法に, 半母體面は併用法に, 胎兒面は藥物的方法に多いと言ひ得る。第3期出血並に後出血は胎兒面に少く, 母體面並に半母體面では多い傾向を示す。その使用する分娩各期と促進方法に依る最高頻度は, 胎兒面の場合には第2期に藥物を使用したとき, 半母體面は分娩の各期にのみ使用したとき, 母體面は前期, 第1期, 第2期にまたがつて使用したときに多い。

第8節 小括並に考察

高年初産婦では母體面並に半母體面, 人工破膜でも母體面並に半母體面が多いが, 臍帶卷絡では3者の間に著差がない。双胎では半母體面が多く殊に陣痛促進法を使用した場合には著しい。骨盤位では3者の間に著差がない。胎勢異常では母體面並に半母體面が著しく多く, これに對して回旋異常では著差は認めがたい。陣痛促進法では母體面並に半母體面が多く, 殊に機械的方法では母體面, 機械的, 藥物併用法では半母體面, 藥物的方法では胎兒面が多い。又使用した分娩各期に就ては各期に限つて使用した場合は半母體面, 2期以上にまたがる場合には母體面が多い傾向を示す。

第4章 總 括

先ず胎盤娩出様式とその機序とについて述べ, 次いで正常分娩では各娩出様式と年齢, 經産回数, 第3期持續時間, 第3期出血, 後出血, 兒體重等との關係に就て述べた。即ち若年では胎兒面が多く年齢の増加と共に母體面並に半母體面が増加し, 經産回数でも同様であり, 第3期持續時間との關係は母體面並に半母體面は短時間のものと, 稍々長時間のものに多く, 第3期出血並に後出血に就ては出血量の少いものは胎兒面が多く, 出血量の

増加と共に母體面, 並に半母體面が増加する。兒體重では正常兒は胎兒面が多く, 未熟兒並に過熟兒は母體面並に半母體面が多い。以上の諸點から母體面並に半母體面は正常分娩の場合でも異常の傾向を示すことが多く胎兒面は正常の経過が多く見られ, 従つて胎盤娩出様式の見地からは母體面並に半母體面は異常胎兒面は正常と言ひ得よう。

次に異常分娩のうち高年初産婦では半母體面, 人工破膜では母體面並に半母體面が稍々多いが, 臍帶卷絡では3者の間に著差は認めがたく, 双胎では半母體面が多く, 骨盤位では3者の間に著差がない。胎勢異常では母體面並に半母體面が著しく多く, これに反して回旋異常では著差がない。陣痛促進法でも亦母體面並に半母體面が多く, その使用時間が長期にわたるときは母體面, 分娩各期に限つて使用するときには半母體面, 第2期に藥物的方法を使用するときには胎兒面が多い。

さて Warnekros 並に Weibel はレ線學的研究の結果, 胎盤娩出様式はその産道通過の状態を示すにすぎないとしたが, その産道通過の状態に影響を與える因子は, 果して如何なるものであろうか。余は以上の統計學的觀察の結果, 子宮の收縮状態がその一因をなすものではないかと考える。即ち頻産婦, 過熟兒, 双胎, 長期にわたり陣痛促進法を使用した場合等には母體面, 並に半母體面が多いが, これ等の場合には一般に子宮收縮が不良なことが多く, 之に對し初産婦, 第2期にピツイトリンを使用したような場合には胎兒面が多いが, これ等の場合には一般に子宮收縮は良好である。即ち子宮收縮の不良な場合には母體面並に半母體面, 良好な場合には胎兒面が多いと思われる。

之を要するに母體面並に半母體面は異常, 胎兒面は正常と言ひ得べく, 産道通過の状態に影響を與える因子としては子宮の收縮状態が大なる役割を演ずるものと考えられる。

擧筆するに當り懇篤なる御指導並に御校閲を賜つた恩師長谷川教授に謹謝する。

主要文獻

- 1) 塚原: 新産婦人科學。—2) 八木: 臨床婦人科産科(昭17)。—3) Warnekros: Zbl. f. Geb. u. Gyn. (1918)。—4) Weibel: Zbl. f. Geb. u. Gyn. (1921) (No. 187 昭28.11.4受付)